プロレタリア通信
共産主義者同盟書記局 '59.7.5 NO.16

志免につぐ合理化斗争の決戦
全千三重斗争を支援せよ！
全千民同の屋台骨を革命的斗争でたゝき折れ!!

(1)

北九州の重工業地帯の心臓ども云える地域で、それが同志が志免の労働者の斗争の支援と革命的方針の主導権確立のために全力あげているとき、現在、東海製鉄の設立をはじめ、続々大工場が建設されている中京重工業地帯の一角で、われが同志は新しい斗争の組織者として、重大な一歩を、資本家、政府および彼らの手先民同にあたえようとしている。

七月一五日の紀勢線全通にともなう郵便労働者の合理化にたいして、全千三重地区の労働者は斗争に立ち上り、すでに十万台近い郵便をとめ、資本家の「郵政」という秩序に大混乱をひき起そうとしている。

七月一日から物だめ斗争（郵便を「規則通りに」配って、集配・整理の時間をおくらせ郵便「物」をためる）斗争）に入っているのだ。

一五日の全通をまそなくにひかえて、この斗争を同盟が全力あげて支援することは、緊急の必要事である。

(2)

現在郵便事業で進められている合理化は、次のさっの内容をもっていると云われる。

①電話関係の合理化――電々公社の委託業務の切かえにともなう合理化

郵便局（特定局）の電話を電話局へ移す。そして電話を扱っていた人を郵政職員から電々公社員に移すというここで全千の組織からはずし、電々ではいろいろ理由をつけてクビにする。

ほとんど女子が対象で、特定局の電話を、まず市外電次に市内電という順でなくす。

②機械化による労働強化、首切り。保険局の原簿管理の機械化。小包整理にコンベアを、配達にスクーターを用。

③能率向上。　日曜日になるべく休暇をとる様にさせて、日曜日の出勤の労働者を半分にして、同じ仕事をこなさす。

④日曜便請負化。　郵便連送を日本郵便株式会社で請負わす。これは郵政省の予算不足をおぎなわすわけだが、これで、実際はふえた仕事が同じ数の郵便労働者にかかることになる。

⑤集中局制の設置。　小包の区分（行く先別に分ける）を、大きな局一つで集中的にやるようにする。

⑥夜間便の増設。これが④の請負化と同時にでる。

⑦全千の組織の強弱による区分法の決定。たとえば名古屋は全千が強いので、集中局を、ここにするはずなのを全千が弱い名古屋中郵にした。

紀勢線の全通にともなって、郵便が増え、その分のため上④の請負が新設される。

そこで、当面、この請負化阻止の斗争に最大の重点をおき、新設請負を粉砕することによって、突破口をきり開く戦術を全盛三重地区は立てた。

全千三重地区は一昨年まで民同幹部によって支配された弱い地区であったが、昨年の春斗のあの激突を指導した若い新しい無党派の革命的労働者が執行部に出て斗争体制をかためゝ、今年の春斗でも斗争を盛り上げ、五月・六月からこの紀勢線全通の合理化反対の討論を、津郵便局中心におこゝ、五月二二日地区が合理化阻止の斗争を決定、討論をおこゝ、六月二八日に最終的に戦術を決定、十五日の全通まで討論をつづけた。集団交渉を行なう、相当変更を拒否する、そして十五日からの日曜便には受けわたしを拒否するという方針で、七月一日から物だめ斗争と集団交渉に入った。

(3)

全千三重の労働者、とくに津支部の労働者は、斗争の中で急速に階級意識をたかめ、自らの斗争の意義を考え、その行く道に深い注意を払いはじめている。職場大会の討議は生き生きと、新しい創意的な戦術が提案され、課長つるし上げこれまでに元気のなかった労働者も積極的に参加しはじめている。これと、彼らが完全に確信をもって斗争に立ち上るうえで最も大きな障害として感じているのは中斗の指導であり、裏切られるのではないかという本能的な不安である。実際にこれまでの中斗の指導は、この斗争にかけてみても全くヒドイものだ。

中斗はこれまでの同様な斗争（大津―今津、小淵沢―小諸、山形―左沢の請負化反対斗争）にさいしても、日曜便請負化阻止ではなく、条件斗争にしてしまっている。

そのときの妥結条件は次の通り、の無内容なその。

一、今回は請負化は一方的には実施せず、組合と協議する。
二、現在の実施分は、の首切配転こない②労働強化こない③サービスダウンこない。
三、合理化全体については別に協議する。
四、この原則で郵政局と地本が協議し実施する。

三重の斗争にたいしても、三重地区は、一ケ月以上のつきあげとケンカに近い論争をした。

中斗は指令35号で36協定（時間外労働の協約）を結べという指令を三重の時間外労働を拒否せよとの要求がつよくでているのに、六月十八日だした。

これに三重が猛烈に抗議したため、中斗は口頭で、「35号の2」を出し、三重では拒否せよという指令をだすことにした。

しかし、そのことは電話で確認されたのに正式に報告されず、三重の抗議の結果、やっと三重斗争についての指令37号を6月25日に発してこれに35号の二を報告した。

この指令の要点は

(イ)関係地本地区は交渉決裂を理由として、当局が七月十五日を期して強行するであろうところの名古屋―島羽間専用自動車請負を実力をもって完全に阻止出来る態勢の確立を図れ。

(ロ)実力行使突入は直ちに各職場ごとに所属長交渉を展開し、これと併行して郵便局集団交渉を行え。

(ハ)各級機関は名古屋郵政局に対する抗議及び撤回を行うとともに関係地本・地区に対し数枚の電報を打電せよ。

で、なるが、このあとにある「指令について」という文のなかでは「この斗争の資金は地本と地区で負担する」と云い、中斗ではビター文出さない。

そして斗争指導について右のきれいな言葉のほかに、実際中斗がやろうとしているのは、「七月二九日からの全千長期大会まで斗争をひきのばせ」と言うことであり、八日から四人の中斗をオルグに送り、

二人を愛知に二人を三重におく、という予定だけだ。
全口斗争化についての三重の猛烈なつきあげをぞ、中斗は「組織実体が弱いし」という理由で斗平指令は出してない。
これまでの斗争の中で、本気で斗う気になって裏切られた経験を非常に多くの労働者がもっている。
そこから今度の斗争のなかでも「中斗は斗う気があるか」という疑いの気持を多くの労働者がもっており、それは斗争が進むほど、そして、中斗の実績が知れればなるほど、労働者のなかに強くなっている。大衆討論のなかで中斗にたいする不信がさいごまで強く出ている。
このこと、大衆はまだ中斗に幻想をもっており、そこから多くの動揺と期待の気持が表明されている。
三重地区の革命的指導部は、中斗への幻想をほとんどもっていない。自らの斗争体制を自らのまで固めつつ、中斗をつきあげバクロする方向を追求している。
斗争のなかで大衆に中斗の本質をバクロすることなしには、斗争の決定的段階でイニシアチブを中斗から奪うことは出来ない。だからこのバクロは絶対に必要だ。このことのバクロは大衆が斗争のなかでつかんだ教訓を利用して、斗争意欲を高める方向で具体的な対策提示と結合して行なわれなければ、困難な斗争準備、斗争組織の段階では中斗不信は自己の力にたいする不信に転じ、大衆の斗争意欲を喪失させるという困難がある。この困難は、突破せねばならない困難であり、三重の革命的労働者は突破こつつある。
おそらく斗争のヤマ、決定的な勝負ドコローは、中斗が来たハ日のあと、中斗の指導をめぐってやってくるだろう。
ここで大衆が中斗を完全にうかし、その裏切りをみきわめ、三重の指導下に中斗をおけるかどうかにすべてがかゝるだろう。

(4)

一日からの斗等で「物」はウナギのぼりに増加している。
五日までは津と桑名が中心で、津で四万の書類がとまり、桑名で六十の小包がとまっていた。
六日からは、伊勢・松阪で休坂に入り、全県の郵便がマヒしはじめる。
労働者大衆の気持が、自らの階級的立場の自覚と、斗争の勝利の道の追求に鋭く集中しはじめている。大衆がすばらしい速度で覚せいしている。
斗争の第一日、津の小包課のたゞ一人こかいない労働者一活動家でも何でもなかった労働者が、組合の要求がないのに休坂をおこなったため、すでに第一日から大きな滞貨が生じている。
郵政省は、この事態に狼狽して係官を津にハケンし、反撃を策している。
斗争は六日から大きく発展する。
そこで予想される敵の攻撃は：
十一日頃に、津に処分を出して、盛り上って来た全真の斗争に水をぶっかけること、と、日逓請負はさしあたりあとまわしにして、ダイヤ改正だけを解決をはかって来てへダイヤ改正の重大な影響のある局と請負化の多く出る局とは違うので（少い活動家を分散し）戦線を分断させ、斗争を中だるみさすこと、である。
しかし、おそらく敵の攻撃によって今週中に斗争は一つのヤマを迎える可能性がきわめて大きく、もし敵の攻勢が今週中になければ、味方は有利な条件で十三、十四日に、先制的な攻勢をかけられるだろう。
そしてこの斗いの結実は、一方では三重全体の盛り上りの状況だが、一方ではさきに云ったように中斗だ。
以上の状況を検討して、三重の同志と中京地方委の同志は、すでに全力をあげた斗争に立ち上っている。
五日、津で中京地方委を開催し、八日前后から三重以外から常駐を系遣し、十一日には中京社青同の活動家会議を召集、三重斗争を支援する。
同志諸君！

三重斗等は志摩につゞく第二の合理化斗等の爆発だ。
三重斗等の爆発は、丁度昨年の和歌山斗等の爆発が日教組全体に巨大な衝撃を与え、斗等をひきこんでいったように、合理化攻撃にさらされている全労働者に衝撃を与え、全国民同の屋台骨に致命傷を与えることが出来るだろう。
現在のところ、斗等などこまで進むかの力関係は甘い評価を許さない。とくに全国中斗の裏切と、津で全く同じ合理化に直面している全電通は日共Gが、「今の電通は時短以外ヨえない」などと云って、共斗を放棄している、紀勢線全通での労働強化にさらされている国労が、斗等を放棄している、ことが三重を孤立させる条件になっている。
日共は「全国は平和斗等をやらない」などと云っているだけで 全然斗等支援に来ていない。
三重斗等にすぐ支援を送れ！ 時間がことを決するのだ。
金を送れ！三重地区はわずか十二万円の活動を地本からもらっただけだ。
よせぶき、敢電を送れ！ 人を送れ！ 十一日はとくに人を送れ！
（宛先）三重県津市津郵便局内 全国三重地区本部
とくに、全国に仕きかけよ。全国の中から、三重支援の斗等と中斗のつきあげを行なわせよ。全国の革命的労働者を結集せよ。
書記局は中京地方委とともに、三重に斗等指導部をおいて斗等に入っている。
車掌て云う。三重斗等を支援せよ。一刻も早く支援をおくれ。